博士学位論文審査要旨

２０１４年1月１６日

論 文 題 目：　備中高梁におけるキリスト教会の成立の研究
学位申請者：　八木橋　康広
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　原　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　関谷　直人
　副　査：　元神学研究科教授　本井　康博

要　　旨：

本論文は、岡山県高梁におけるプロテスタント・キリスト教の開教から、現高梁教会会堂が設立されて町に根付くまでの歴史的過程を備中高梁の地理的、歴史的、文化的特質を踏まえて、考察したものである。

序章は、研究課題を提示する。日本においてプロテスタントが受容され根付いた土地は、東京、大阪などの大都会、あるいは県庁所在地などの地方の拠点都市であり、その主な担い手は伝統的な共同体から自立した近代的中産階級であった。ところがその対極に位置する中国地方の山間部で、旧時代の伝統を色濃く残す高梁でのプロテスタント受容は、日本の先進地域とはおのずから性格を異にした。

その点を明らかにするために、まず第一章では、開教以前にまで遡る。当地で開教の淵源は、幕末における新島襄と備中松山藩（現高梁市）の人々との出会いにある。この藩は、新島が所属した上州安中藩のいわば本家にあたる。藩主の板倉勝静、儒学者の山田方谷や川田甕江などと新島との直接的、間接的な交流が、高梁伝道の底流に潜在する。

ついで第二章は、高梁伝道の背景、すなわち、幕末維新期の動乱や維新政府の文明開化が高梁の住民たちに人心の荒廃をもたらしたことを明示する。

第三章は、岡山県にプロテスタントが根づく経緯を論述する。留学帰りの新島やアメリカン・ボードの支援、それらを受け入れた岡山県の有力者たち（中川横太郎、県令の高崎五六ら）の働きにより、プロテスタントが岡山県都に定着する。

第四章は、それが山間部の高梁にまで到達するためには、J.C.ベリーや金森通倫、さらには新島自身による高梁伝道が必要であったことを実証する。高梁伝道の中軸には、いつも新島がいた。彼が培った精神的風土が教会創立に有利に働いた。一方、地元の受け皿として高梁教会設立の主軸となったのは、新島の感化を受けた柴原宗助、二宮邦次郎、福西志計子、赤木蘇平らであった。

第五章では、牧師としてこの地に招聘された森本（松村）介石、第六章では同じく古木虎三郎（同志社卒）の牧会も、不可欠であったとされる。前者は、未曽有のリバイバルと大迫害事件を経験し、後者は未だに深い亀裂の中にあったキリスト教徒とかつての迫害者を含めた教会外部の大多数の町民との精神的わだかまりを取り除き、キリスト教を真に高梁に根付かせることに成功した。

終章は、古木が手がけた現高梁基督教会堂の竣工は、高梁全体の文明開化の象徴となり、キリスト教の受容を巡って町を二分した対立を和解させた象徴でもあることを結論づける。こうして高梁に、この町の精神性的風土に根ざしたキリスト教が成立した。以後、教会は、高梁におけるキリスト教精神と近代文化の主要な担い手としての位置を確立し、今日に至っている。

本論文では、従来の高梁教会史の水準をはるかに超える精緻さで分析と叙述がなされているうえに、高梁に特有の歴史的、地域的特性をもあわせて析出されている。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１４年1月１６日

論 文 題 目：　備中高梁におけるキリスト教会の成立の研究
学位申請者：　八木橋　康広
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　　原　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　　関谷　直人
　副　査：　元神学研究科　教授　本井　康博

要　　旨：
　八木橋康広氏は、1993 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、2006 年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2014 年 1 月 16 日 10 時からおよそ 2 時間にわたって、神学研究科委員会は総合試験を実施し、八木橋氏から十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有していることを確認した。また、2 外国語の語学力（英語、ドイツ語）を十分に有していることが確認された。
　以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　「備中高梁におけるキリスト教会の成立の研究」
氏　　名：　八木橋　康広
要　　旨：

本論文は岡山県備中高梁地方にプロテスタント・キリスト教が伝道され高梁基督教会が設立されて町の中に根付くまでの歴史的過程をその前史（幕末期）にまで遡って考察したものである。

序章では、まず研究課題を提示した。日本においてプロテスタント・キリスト教が受容されて根付いた土地柄は東京、大阪などの大都会、或いは県庁所在地などの地方の拠点都市であり、その主な担い手は伝統的な共同体から自立した近代的中産階級であった。ところがその対極に位置する中国地方の山間部の旧時代の伝統を色濃く残す備中高梁において明治十年代にキリスト教が伝道されて二十年代前半には町の中に確たる基盤を確立した。その過程を歴史的背景も含めて考察するのが本論の研究課題である。そのために高梁におけるキリスト教成立に関する一連の先行研究の概要を批判的に検討した。次に本論文の拠って立つ方法論を提示した。

方法論として①有賀鉄太郎著『象徴的神学』、②魚木忠一著『日本基督教の精神的伝統』から主に以下の論点を抽出した。①歴史上の人物の信仰体験の意味は研究主体である自分自身の信仰体験を通して共感的に理解され解明されるべきである。この方法によって研究対象である人物の信仰体験の基本的な構造を探求してゆく。②世界宗教であるキリスト教は決して一枚岩ではなく精神的風土によって六つの類型に分類される。日本に成立したキリスト教はその中でも日本類型に属する。それは、仏教、神道、儒教という日本の伝統的な宗教が培った精神性を土台にしながらも明治前期に欧米から移植されたキリスト教（主にプロテスタント）に触発して福音信仰として成立したものである。備中高梁地方に成立したキリスト教は日本類型の典型であると考えられる。

第１章では、新島襄と備中松山藩の絆を叙述する。高梁の地にプロテスタント・キリスト教が伝道された淵源を訪ねると新島襄と備中松山藩の人々との出会いにまで行き着く。備中松山藩は板倉勝静（かつきよ）が藩主に就任するや儒学者の山田方谷を登用して藩政改革に取り組んだ。改革は藩と領民生活のあらゆる領域に及んだ。その中で川田甕江（おうこう）が登用された。川田は江戸藩邸の儒学師範となったが、分家の安中藩板倉家にも出講してそこで少年時代の新島襄と出会い終生にわたる師弟の絆を確立した。さらに川田は藩主の側近として藩に近代的海運・海軍を建設するために洋式帆

船（快風丸）を導入し、幕府軍艦操練所で航海術を取得していた新島を同船での航海訓練に参加させた。

この航海で自由を体験した新島はその意味を追求していくうちにアメリカ合衆国に密航して新知識とキリスト教を修得してその力をもって危機的状況にある祖国を救うことを決意した。新島は川田と板倉の斡旋で快風丸に便乗することができて江戸から開港地であった函館に至った。同地で備中松山藩士らの決死の幇助でアメリカ船に匿われて密出国に成功した。その後新島襄は希望通りにアメリカにて修学がかなった。日本人初の学士となり牧師の資格を得て明治 7 年（1874）帰国し翌明治 8 年（1875）京都に同志社英学校を開校した。

第２章では、備中高梁（明治維新以前は備中松山）における幕末維新の動乱と明治政府による文明開化路線とそれに翻弄される人心の一断面を叙述し、未曾有の動乱と社会革命が高梁にも激烈な社会秩序の動揺と人心の荒廃をもたらしたこと、心ある人々は真に魂を慰め希望を与える福音を求めていたことを解明する。

第３章では、前半にてプロテスタント・キリスト教が岡山県に到達するまでの過程を新島襄の帰国後の活動とアメリカン・ボード、そして彼らを受け入れた岡山県の有力者たち（中川横太郎・県令高崎五六）の思想と行動と人脈に焦点を当てて解明する。後半では県都岡山に拠点を確立したキリスト教がさらに山間部の高梁にまで到達する過程を取り扱う。その際、キリスト教を伝道した側の中心人物である J.C.ベリーと金森通倫の略歴、そして新島襄の第一回の高梁伝道の模様を詳述する。彼らの播いた福音の種を受け入れ信じて教会設立の中心人物となった柴原宗助・二宮邦次郎・福西志計子・赤木蘇平の略歴と活動を紹介する。これらの人々は高梁教会設立の中心メンバーであると同時に高梁における近代的教育・医療・産業の旗手でもあった。

第４章では、教会創立の前段階である高梁安息日学校の開設から高梁基督教会創立までの過程を叙述する。新島襄の第一回高梁伝道を契機に高梁では上記の人々を中心にしてキリスト教の伝道熱が高まり組織作りが始まった。その最初の動きとして定期的な演説会が開催された。この活動は町民に新鮮な衝撃を与えて賛否両論を巻き起こした。キリスト教支持派の高揚と反対派の忌避や妨害の中で明治 13 年(1880)7 月に最初の組織化がなされて高梁安息日学校が開校した。これを機軸にして正式な教会創立の機運が高まり同 15 年(1882)4 月二宮邦次郎を仮牧師に、伊勢（横井）時雄を設立委員長にして高梁基督教会の創立式が行われ柴原以下 15 名の高梁人が金森通倫より受洗した。創立式中に第二代牧師として上代知新（かじろともよし）が招聘された。この後二宮は上代の故郷の愛媛県松山での伝道を担い、上代は二宮の故郷の備中高梁での伝道を担ったが、そこには両者の

格別の絆が推測できる。しかし上代は僅か半年で辞任し、第三代牧師として森本介石が赴任した。

第5章では、第三代牧師である森本介石の時代に起こったリバイバルと大迫害事件という劇的な出来事とその顛末によって高梁基督教会の霊性の土台が形成されたことを、主にこの一連の出来事を指導した森本介石の思想と行動に即して解明する。リバイバルは、新約聖書使徒言行録2章に記されたペンテコステの聖霊降臨の高梁における再現ともいえる事態であった。これを体験したのは100名前後の信徒であるが、彼らは集団的熱狂状態の中で罪深い古い自己が死んでキリストの永遠の命に与ったと確信し、すべての隣人にその喜びを伝えようという熱気に満たされた。しかしそれ以外の大多数の町民には未だに耶蘇教とは最も忌むべき邪宗門であるという封建時代の感覚が染みついていた。それに加えて高梁の警察署長が個人的にキリスト教を烈しく憎悪し住民に迫害を扇動していた。

リバイバルによるキリスト派の大高揚は、警察署長はじめ反キリスト派の憎悪に火を付け、両者の対立は先鋭化し、その結果として明治17年(1884)7月の大迫害事件（暴徒の教会堂襲撃）が勃発した。しかし、高梁警察署長の上司である高崎五六岡山県令は大のキリスト教支持者であり、アメリカン・ボードと提携して岡山県の近代化を推進していた。高梁における迫害事件を知った高崎は直ちにキリスト教徒を保護すると同時に迫害の厳禁と事件の徹底糾明に乗り出し、警察署長の解任をはじめ迫害に加担した者を粛清する人事を敢行した。これを見た一般の高梁町民は、キリスト教は仏教や神道と同じように公に認められた宗教でむやみに迫害してはならないことを体感した。これを機に以後公的な場での迫害は終息した。森本介石は、迫害事件の終息の直後に辞任した。新たに赴任したのは第四代牧師となる古木虎三郎であった。

第6章では、明治17年夏の大迫害事件の終息から明治25年(1892)の古木虎三郎の辞任までの時代を叙述する。大迫害事件の表面上の終息を受けて就任した古木虎三郎の使命は、未だに深い亀裂の中にあるキリスト教徒とかつての迫害者を含めた教会外部の大多数の町民との精神的わだかまりを取り除き、キリスト教を真に高梁に根付かせることにあった。古木はこの使命を遂行するために聖書の説く罪の悔い改めを強調した。これに応じて町民の中から続々とおのが罪を古木に告白して洗礼を授けられる者が出た。古木の在任中に高梁の人口の内8パーセントを超える人々が教会員となった。これに加えて古木は新たな教会堂を建立する事業をはじめた。この資金のほとんどは、教会員・求道者と一般の町民によるものだった。古木の呼びかけに応じて自らの罪を告白した者、それには至らなかったが教会堂建築のため浄財を投じた一般の町民の中には、かつて信徒への迫害に加担した者も多数いたと推測できる。

終章では本論文全体の結論が示される。明治22年(1889)に現存の高梁基督教会堂が竣工した。

この建物は、高梁最初の洋風大型建築物であり、その意味で高梁全体の文明開化の象徴と言える。それと同時にキリスト教の受容を巡って町を二分した対立を和解させた象徴でもある。以後高梁教会は、高梁におけるキリスト教精神と近代文化の主要な担い手としての位置を確立し今日に至っている。

こうして備中高梁に、この町の精神性的風土に根ざしたキリスト教が成立した。